

マラルメの「小曲（軍人）」と報復論

野口 修

はじめに

マラルメは1895年から翌年にかけて、『白色評論』誌に「ある主題による変奏曲」と題された合計11編の連載記事を書いている。本稿で取り上げる「小曲（軍人）」は、同誌2月1日号に掲載された連載第一回目の「行動」の冒頭にエピグラフとして掲げられたソネである。「行動」は後に『ディヴァガシオン』に「制限された行動」と改題されて収録されたが、詩篇は生前の彼が刊行を準備していたドゥマン版『詩集』には収められていない。この詩篇が読者の手に届くには1913年の NRF 版『詩集』の刊行を俟たねばならない。7音綴詩句によるエリザベス朝式もしくはシェイクスピア式ソネの形式で制作されたこの詩篇は、豊かな脚韻の音色を奏でながら、国境警備の兵士に扮したマラルメ自身の独白を通して、ユーモラスな趣を呈している。

Petit air (guerrier)

Ce me va hormis l'y taire
Que je sente du foyer
Un pantalon militaire
À ma jambe rougeoyer

L'invasion je la guette
Avec le vierge courroux
Tout juste de la baguette
Au gant blanc des tourlourous

Nue ou d'écorce tenace
Pas pour battre le Teuton
Mais comme une autre menace
À la fin que me veut-on

De trancher ras cette ortie
Folle de la sympathie

小曲（軍人）

暖炉の火で赤く照り返されて
まるで軍服のズボンみたいな俺の足
あれについて黙っていなけりゃならないのを除けば
満更でもないな

侵入に備えてこの俺が見張ってるわけさ
兵隊さんの白い手袋をつけて
手に握った棒切れには
全き正義にかなった汚れなき憤怒

むき出しでも堅い樹皮が付いたままでも構わない
棒切れはチュートン人を叩きのめすためじゃない
それとは別の脅しみたいに握ってるんだ
結局みんな俺に何を求めるといふのだ

狂信的な賛意に染まったあのイラクサを
短くぶった切るぞと脅してるのに⁽¹⁾

この詩篇はこれまでに注釈家たちからさまざまな評価を受けてきた。「行動」のエピグラフの役割を与えられていたことから、この詩論と関連づけながら読まれることが多かった。この詩論は、自宅に頻繁に現れる訪問者に対し、マラルメが助言を与えるという体裁で構成されている。即座に行動を起こすべきという性急な考えに凝り固まったこの訪問者、おそらく火曜会に集っていた若手作家の一人と目されるこの訪問者に対して、彼は極めて簡潔な助言を与える。

行動とは「多くの人々に一つの運動を生じさせること」⁽²⁾であり、そのためには何よりも作品を書き、そして「出版したまえ。」⁽³⁾文学の世界で生きる以上、それ以外に作家として選ぶべき行動はない、という姿勢がこの詩論の中では一貫して示されている。では、訪問者が繰り返し彼に訴えた行動とは何か。ケヴィン・オニールは、詩篇が掲載される前年の1894年に『メルキュール・ド・フランス』誌上において象徴派の若手カミーユ・モークレールとナチュリスムの主導者アドルフ・レットとの間に起こった論争に注目している。マラルメは旗色の悪くなったモークレールから論争への介入を再三求められ、不本意ながらも騒動に巻き込まれていった。そのことからオニールは、マラルメがこうした背景から「行動」と詩篇を書いたと考え、この詩篇はマラルメの「状況詩にほかならない」⁽⁴⁾と評している。これに対してガードナー・デイヴィスは、1894年の終わりから翌年の初めまでのマラルメの書簡の中ではこの件について何も書かれていないことから、オニールの見解はあくまでも仮説の域を出ないと述べ⁽⁵⁾、論争の騒動と無関係とは断言し難いにせよ、詩篇は状況詩ではなく、そこにはむしろ詩的創造における孤独の必要性という、より普遍的な問題が読み取られると主張している⁽⁶⁾。他方、川瀬武夫は1890年代に盛り上がったアナキズム運動に多くの若手の作家や芸術家が共鳴していたことから、「行動」において訪問者がマラルメに訴えた行動とは、躊躇なく爆弾テロを繰り返すアナキストたちへの加担を指していると考えている⁽⁷⁾。川瀬は詩篇には言及していないのだが、詩篇も同じ文脈で読むことができるだろう。また、ポール・ベニシューはモークレールとレットの論争やアナキズムには触れず、同時代を一種のトンネルとみなす「制限された行動」のよく知られた一節とこの詩篇との関係を指摘している⁽⁸⁾。

こうしたこれまでの注釈家たちの努力からは多くを教えられたが、本稿ではこの詩篇を別の角度から読んでみたい。すでに述べた通り、この詩篇はマラルメが国境警備の兵士になった自分自身を想像しながら展開していく。これはドイツとの国境を警備する兵士のことであり、そうした兵士になるという想像の土台には、当然ながら当時国民の間に広まっていた対独報復感情があるのだが、これまでの注釈では、それについてはベニシューが部分的に触れているのを除けば十分に考察されてこなかった。しかし、この対独報復感情の問題は非常に

重要である。周知の通り、フランスは1871年に普仏戦争に敗れると、アルザス・ロレーヌを失い、また50億フランの賠償金を課せられた。この敗戦がフランス社会に与えた衝撃は巨大なものだった。戦争による直接的な人的、物的損害に加えて、3年以内に支払う約束の賠償金は国民に多くの負担をもたらした。しかも、アルザスは綿工業の中心地、ロレーヌは鉄鉱石資源の重要な産地だったので、領土の喪失は経済に深刻な打撃を与えた。隣国に向けられた国民の憎悪、不満は大きく、また根深いもので、これ以降、フランス社会は長期にわたってその土壌を感情的な対独報復論に浸食され続けることになる。そして、詩篇を読むうえでとりわけ重要なのは、詩篇が公表される前年の1894年にドレフュス事件が発生していたことである。ドイツのスパイの嫌疑をかけられたドレフュス大尉の逮捕は、国民の心の奥底に澱のように溜っていた対独報復感情に火をつけることになった。そのため、『白色評論』誌に載ったマラルメの詩篇を目にした読者たちは、そこに否応なく復讐心に燃えた好戦的な兵士の姿を見出したはずである。そこで、私たちはこの詩篇について、敗戦後のフランスを覆っていた対独報復論という視点から注釈を試みることにしよう。ただし、詩篇がそうした対独報復論と単純に関係があることを示すのが目的ではない。この詩篇はそれ以上のことを言っている。私は、この詩篇は一国の国民の大多数がなぜ対独報復論という単一の考えにいともしも容易に染まってしまうのか、という問題に一つの解を与えていると考えている。以下、そのことを論証していきたい。

I. 対独報復論とマラルメ

マラルメが晩年に制作したこの詩篇をより正確に捉えるために、まず普仏戦争とその敗北後に広まった対独報復論が彼とどのようにかかわっていたのか、注釈に取りかかる前に簡単に確認しておこう。ドイツ人女性を妻にしていたという個人的事情が彼の生活に何らかの影響を及ぼしていたのかどうか、はっきりしたことは分かっていないが、いずれにせよ、彼もまたフランスで暮らす一人の国民であり、戦争と無縁ではなかった。実際、それは彼の私生活だけでなく、詩人としての活動にも暗い影を落とすことがあった。戦時中の彼はアヴィニオン在住で、砲火の轟音に怯えることもなく、特に被害を受けた様子はない

のだが、1871年1月19日にビュザンヴァルで起こった戦闘で友人の画家アンリ・ルニョーを失っている。マラルメにとってルニョーは、1862年のフォンテーヌブローへの散策旅行で知り合ってから、詩や芸術について心置きなく語り合える貴重な同世代の仲間の一人だった。彼はこの散策旅行にも参加していたアンリ・カザリスに1871年3月3日に書簡を送り、かけがえのない友を戦禍で失った悲しみを分かち合おうとしている。

まずは、つらさはいつまでも消えないままだが、握手を。いや駄目だ、親愛なる友よ、自分自身に絶望してはいけない。僕たちの兄弟[ともいうべきルニョー]の仇を討つ方法、この罪が手の施しようのないほど完遂されたのではないようにする方法、それは一つしかない。それは、僕たちそれぞれの異なる本性において、彼を体现することではないだろうか。それに、これならできるのだ⁽⁹⁾。

マラルメは確かにルニョーの突然の死を悼んでいるのだが、文面を読む限り、彼がここでそれ以上に強く訴えているのは、戦争というむき出しの暴力と詩的営為とを峻別しなければならぬという要求であるように思われる。戦時下において彼がさまざまな人々に送った書簡には、戦局やそれに対する当局の方針についての言及が散見されるものの、そこに見られる彼の主要な関心は、戦争よりもむしろ詩人として自己を打ち立てることに向けられていた。事実、上の書簡はプロシア軍のパリ入城からわずか2日後に書かれたもので、情勢はいよいよフランスに不利になっているのだが、彼はまるでそのことにはあまり気を留めていないかのように、書簡の中で「僕は再び純粋な単なる一人の文学者になる」⁽¹⁰⁾と宣言し、これから取り組むべき構想を説明している。戦時下の彼にとって何よりも重要だったのは、暴力という汚れた不純物から彼自身の詩的営為の領域を守ることだったと考えられる。

ところが、やがて彼は芸術の開花が暴力によって無残にも侵害されるのを目撃することになる。1887年4月のシュネブレ事件を契機にフランス国内で対独報復を求めるプーランジスム運動が高まると、極右の活動家たちによってワーグナーの『ローエングリン』パリ初演が中止に追い込まれるに至った。彼は1874年の『最新流行』誌第7号に『タンホイザー』パリ上演を熱望する一節を掲載し⁽¹¹⁾、また、そのオペラの本格的な舞台上演を見たことはなかったものの、

1885年にはさまざまな文献を読んでワグナー論を書くなど、このパイロイトの巨匠の試みには強い関心を寄せていた。そのため、当時『独立評論』誌で「演劇についてのノート」を連載していた彼は、1887年の同誌6月号の記事の中で、彼だけでなく同時代の多くのフランス人からワグナーの作品を観劇する機会を奪った極右の活動家たちに対して、直ちに非難の声を上げている。

壮麗な輝きを前に精神を集中させようと努めている選良に向けて、かつてこれほどまでの侮辱がなされたことはない。政府の介入があったにせよ、なかったにせよ、それ自体が狂乱している傑作を禁止しろと要求してきたごろつきどもから投げつけられた侮辱のことだ。こんな恥辱があり得るとは、私はいまだ考察したことがなかったのだが、それが起こったというわけだ⁽¹²⁾。

彼は、隣国への怨嗟の念に駆られた人々の独善的な振る舞いが、芸術の領域に平然と侵入してきたことに対して強烈な不快感を表明してはいるものの、しかし、ここからは彼が対独報復論の内実をどのようなものとして捉えていたのか読み取ることはできない。彼は極右の活動家たちをごろつき呼ばわりして非難しているが、そのごろつきとは一体何者なのか、彼らはなぜごろつきになったのか、彼らの刹那的な行動を生み出す主要な要因の一つだった報復感情とはいかなるものなのか、そうした問題については、ここでは何も述べられていない。

同じことは彼が1897年の『メルキュール・ド・フランス』誌12月号に寄せたアルザス・ロレーヌ問題についてのアンケートの回答についても言える。同誌編集部は、常に対独報復感情の中心にあり続けたアルザス・ロレーヌ問題についてのアンケートを企画した。編集部は多くの人々に協力を求め、自分自身の考え、若い世代の考え、国民の平均的な考えのそれぞれがどのようなものだと思うか、回答を求めた。マラルメの回答は次のように書き出されている。

私は若い世代の意識をほとんど知りません。文学の若い世代は別ですが、それはここで表明されますね。国民の平均的な意見と言われても、ますます分かりかねます。ほとんど新聞を読まないもので。しかし、私自身の意見ならはっきりしています。アルザス・ロレーヌがドイツによって併合された人と々が話していると、あの時と同じ耐え難い不快感が、1897年になってもまだ1871年のように、私を苦しめる

のです。他にもいろいろと気がかりなことがある中でも、この地方が現実にドイツ領に移ったと考えることには、私は一瞬たりとも慣れたことはありませんでした⁽¹³⁾。

この回答を額面通りに受け取ることはできない。世論を知らない理由として、彼は普段から新聞を読む習慣がないことを挙げているが、『ディヴァガシオン』に収録されたいくつかの散文作品では、新聞が書物との比較などを通して重要な主題になっており、彼が新聞に強い関心を持っていたのは明らかである。そのため、アルザス・ロレーヌ問題について示された彼自身の意見について、果たしてそれが本心から述べられたものなのかどうか判断し難い。彼は回答をさらに続ける。

私は領土奪還を要求しているのではありません。戦争とは一つの賭け事、それもこの上なく愚かな賭け事です。勝負に負ければ、賭け金を払うものです。殺戮が起こると同じ理由で、領土併合が起こるのです⁽¹⁴⁾。

すでにヴォルフガング・シヴェルプシュが指摘していることだが、リトレのフランス語辞典で報復（revanche）を引くと、スポーツ用語としての意味が記されている⁽¹⁵⁾。この語は前半戦において負けた方が失った点を後半戦で取り戻すことを指す。マラルメはリトレの辞書を好んでいたが、さすがに辞書を参照しながらこの回答を書いたというわけではないと思われる。とはいえ、彼があえて辞書の定義と大差ないような意見を述べたという事実は注目に値する。そうした意見を公表した彼の狙いは、回答の締め括りに置かれた次の一文によく示されている。

以上が、親愛なる『メルキュール』誌よ、たまたま街頭で意見を求められた一人の市民が述べるような、取るに足らない意見です⁽¹⁶⁾。

ここから明らかなように、彼は詩人としてではなく一人の市民として回答を書いたのだった。回答を貫く素っ気なさ、無意味さは、彼にアルザス・ロレーヌ問題について特に述べるべき意見がなかったということの反映ではなく、詩人としては対独報復論を論じないという立場の表明だったと言えるだろう。編集部は詩人としての彼にアンケートへの協力を要請したのだが、彼はあえてこ

のような回答を寄せることで、詩人の選ぶべき立場を言外に示したと考えられる。かつてルニョーの死と戦争とを直接的に結びつけるのを拒否したり、極右の暴挙を非難しつつも彼らを突き動かした報復感情には触れなかったりしたことは、アンケートへの回答と同じ姿勢によるものとみなすことができる。その意味で、対独報復論をそのまま取り込んだ詩篇として読むことのできる「小曲(軍人)」は、彼の作品としては例外的な性格を持ったものであり、周囲に広まっていた報復感情を彼がどのような眼差しで見ているのか知る貴重な手掛かりにもなるだろう。

II. 兵士になった詩人

それでは詩篇を注釈していこう。第1カトランは室内を舞台にしている。部屋にいるのは詩人一人きりである。第1行目の冒頭のCeは、ベニシューによれば、マラルメ好みの拡張的な使用方法になっているという⁽¹⁷⁾。このCeは、オニールがそうしているように、ÇaやCelaで置き換えた方が分かりやすいだろう⁽¹⁸⁾。Ça me vaに相当するので、詩篇は部屋にいる詩人が感じていた満足感の独白から始まる。その満足感には直ちにhormis l'y taireが続き、一つの留保が付されるのだが、それについては後で触れる。詩人の満足感は何に起因するのか。それは第2行目から第4行目にかけて示される。部屋の中にいる彼のそばには暖炉が設えられている。暖炉には薪がくべられ、燃やされている。デイヴィスはマラルメが1894年の10月末まで夏のヴァカンスをヴァルヴァンの別荘で過ごしていたことから、この部屋を別荘と解しているが⁽¹⁹⁾、夏に暖炉を焚くとは思えない。詩篇が公表されたのは2月1日なので、むしろ季節はまだ寒さの厳しい冬だと思われる。煌々と焚かれた暖炉からは、明かりが漏れ、周囲を穏やかに照らしているので、すでに日が暮れていることが分かる。肌を刺すような冬の夜の凍てつく寒さとは対照的に、部屋の中にいる彼は暖炉の炎の心地よい温かさに包まれている。すると、彼は自分の足が暖炉の炎の明かりで赤々と照らされている様子に目を留める。ここから彼の想像が始まる。ベニシューによれば、赤いズボンフランス兵の軍服として広く知られているものだった⁽²⁰⁾。このことから、彼は暖炉の炎の明かりに照らされた自分の足を見て、颯爽と軍

服を身に纏った兵士を連想し、百戦錬磨の勇猛果敢な兵士になった自分を想像して楽しんでいる、ということが分かる。しかし、彼はもちろん軍人ではなく、一介の文士でしかないわけで、ここからは、実際には戦地に赴くこともなく、そもそも重い銃器を手にした過酷な戦闘に耐えるだけの体力があるのかどうかすら疑わしい当時の平凡なフランス人男性が、自分自身を顧みることもなく、むやみに威勢のいい想像で一人悦に入っている姿が、実にユーモラスに浮かび上がってくる。付言すれば、この点に関して、ベニシューはこうしたユーモアは、わずか7音綴だけで構築された詩篇において、第1行目の *hormis l'y taire* と第3行目の *militaire* が大掛かりに奏でる語呂合わせの脚韻によって、いっそう際立たされていると指摘している⁽²¹⁾。ベニシューが言っているのは、この脚韻は詩人の安直な想像を語呂合わせの賑やかなリズムではやし立てる効果を持っている、ということだろう。その意味では、確かにこの脚韻は詩篇の展開を音のレベルで支える重要な役割を担っていると言える。

それでは、詩人の満足感に付された留保に戻ろう。原文では第1行目の後半に挿入された *hormis l'y taire* の部分である。これは私たちの注釈にとって重要な箇所なので、やや細かく見ていく必要がある。*hormis* と *taire* については特に問題はない。ベニシューは、*ly* の *y* は民衆的なことば遣いの中でしばしば使われる虚辞的な用法であり、特に古い田園風歌謡に見られるもので、そのような用法が導入されることで、詩人の独りよがりの想像がよりユーモラスになっていると述べている⁽²²⁾。本稿でもこの説を支持したい。問題は *ly* で省略形になっている代名詞の *le* である。詩人は暖かく快適な室内でぬるま湯のような居心地の良さに浸っているが、この満足感には、*le* で示されたあることについて沈黙を守らねばならないという留保が付いている。あることとは何か。これに関しては、注釈家たちの判断は割れている。オニールはこの詩篇をモークレールによってレッテとの論争に巻き込まれた騒動についての状況詩とみなす立場から、*le* は論争のために書かれた記事のことで、*y* は詩篇と「行動」が掲載された『白色評論』誌を指していると述べている⁽²³⁾。確かに論争をめぐる状況詩として詩篇を読むことも可能であるには違いないが、本稿で私たちは詩篇を普仏戦争と関連させようと試みているので、オニールのこの説は取らない。オニールの説が説得力を全く欠いているというわけではない。デイヴィスは、*le* は詩

人が満足感を得ていることを指していると書いている⁽²⁴⁾。しかし、デイヴィスはなぜ詩人が自らの満足感について沈黙を守らねばならないのか説明していないので、納得しがたい。leについては、ベニシューが興味深い説を紹介している。ベニシューはleが対独報復論、特にアルザス・ロレーヌ奪還の主張を指していると考えている。詩人は想像の世界で愛国心に燃える兵士になったにもかかわらず、領土の奪還については口をつぐまなければならない、ということである。これはなぜか。ベニシューの調査によると、ガンベッタは1871年11月16日の演説で、聴衆に向けて「あの国のことは決して口にするな、しかし諸君にはよく知っておいてもらいたい、我々が常に考え続けていることを」(Ne parlons jamais de l'étranger, mais que l'on comprenne bien que nous y pensons toujours)と述べているのだが、これが後に、「常に考えよ、しかし決して口にするな」(Pensons-y toujours, n'en parlons jamais!)と変形されて、敗戦後のフランスで広まっていったのだ。hormis l'y taireには当時人口に膾炙していたこのことばが重ねられているというのがベニシューの説である⁽²⁵⁾。この説は説得力があり、私たちも採用することにする。この留保が付されたことで、想像の中で軍服を見事に着こなす兵士になった詩人としても、ドイツをぶっ倒せとか、我らの領土アルザス・ロレーヌを取り戻せとか、対独報復に関することはそう簡単には口に出せなくなる。しかしながら、詩篇の中で彼は、自らの想像の世界に満足感を覚えつつも、対独報復について言いたくて仕方がないのだ。

詩人の満足感に付された留保についてのベニシューの指摘はここで終わっているのだが、私たちとしては、この指摘を受け入れつつも、hormis l'y taireについて違った視点からさらに考察を進めることにしよう。この詩篇には、詩の始まりを告げる重要な第1行目の中に、人々の対独報復感情を刺激する一種の標語として当時よく知られていた決まり文句の一部が、変形されて組み込まれていることが確認された。『白色評論』誌を手に取り、マラルメの詩篇を読み始めた同時代の読者たちの中には、全員ではないにせよ、このことに気づいた者も多かったと思われる。では、彼らはどのようにしてこの決まり文句を覚え込んだのだろうか。いやむしろ、詩篇の読者に限らず、当時の人々はどのようにしてこの決まり文句を知り、容易にそらんじることができるまでに至ったのだろうか。

不特定多数の人々の間に同一のメッセージを定着させる最も有力な手段はマスメディアである。19世紀においては新聞が最大のマスメディアだった。ピエール・アルベールは、1871年から1914年までの44年間を「フランス新聞界の「ベルエポック」」⁽²⁶⁾と名づけ、この期間における新聞の著しい発達を強調している。新聞はちょうどフランスが普仏戦争に敗北した年から急激に発行部数を増大させ、より多くの人々の手に届くようになっていったのだった。戦前から戦時中はその準備段階であり、敗戦後ほどではないにせよ、やはり毎日大量に新聞が発行されていた。

普仏戦争についてマスメディアがどのように報じていたのか調査したエメ・ドゥピュイによれば、開戦の時点では新聞各紙の主要な論調は楽観的なものだった。1870年7月19日の宣戦布告の日に出た「リベルテ」紙には、当局から通知された計画を紹介する記事が掲載されている。この記事の中では、隣国の主要都市を次々に攻略した上で、フランス主導でドイツ再統一を行い、しかもそこからプロシアとオーストリアを除外するという、極めて楽観的な見通しが示されている⁽²⁷⁾。こうした報道は人々を熱狂させたであろうが、しかし実際には、周知の通り、フランス軍は各地で次々に敵軍に敗れていった。新聞各紙は開戦後、直ちに特派員を戦地に派遣したものの、参謀本部の規制で前線での取材は困難だった。そのため、戦闘に敗れて退却中の部隊と現地でも偶然に出くわす特派員もいた⁽²⁸⁾。開戦から2か月も経過しない9月2日にナポレオン三世がセダンでプロシア軍に拘束され、フランスの劣勢が明らかになると、プロシアへの報復感情の高まりを伝える記事が紙面に踊るようになる。皇帝が虜囚の身になってからわずか2日後、「パリ・ジュールナル」紙は次のような記事を掲載した。

プロシア人諸氏は、パリの姿を見ることができたとしても、おそらく彼らの望む成功を確実に成し遂げ、戦闘を終結させることはできないだろう。事実とはいえ、2日前からパリでは、報復の芳香が漂い、我々の心を躍らせ、希望と安らぎに満ちた涙の流れる我々の目を再び上げさせている。10万人の国民遊撃隊員（mobile）の到着は我々の熱狂を絶頂に至らせたのだった⁽²⁹⁾。

対独報復感情は、祖国の危機を皮膚感覚で経験していた人々の間に自然に沸き上がっただけでなく、このようなマスメディアの報道によって増幅されたと

いう面も否定できないだろう。さきほどのガンベッタのことばがマスメディアを通してどれほど繰り返されていたのか確かなことは言えないが、敗戦後のフランス社会でも、そのことばは長く人々に記憶され続けた。

私が高稿で提案したいのは、第1行目にガンベッタの有名なことばが組み込まれていることから考えて、この詩篇の中で想像上の兵士になっている詩人は、他者のことばを内面化したことによっていつの間にか対独報復論の熱狂的な支持者になっていた、という解釈である。一口に対独報復論の支持者になると言っても、さまざまな理由があり得る。家族や友人を敵に殺害されるとか、敵軍の侵攻で大事な財産を失うとか、そうしたつらい経験から報復感情に染まることもあるだろう。あるいは国際情勢を冷徹に考察した結果、祖国の未来のために対独報復論を支持する場合もあるに違いない。しかし、詩篇で示されているのは、繰り返し他者のことばに晒されたことで、それをあたかも自分自身で考えたことばであるかのように錯覚してしまった人物像であると思われる。この詩人は他者のことばと自分のことばの区別がつかないのだ。言い換えれば、第1カトランで歌われているのは、ことばの力、その感染力に踊らされた人間の滑稽な姿なのである。

Ⅲ. 詩人の憤怒

第2カトランに移ろう。第5行目で想像上の兵士になった詩人の役割が明示される。彼は国境警備の最前線で敵の侵入に備える重要な任務に就いている。国境近くの宿営地で寝泊まりしながら、夜間の偵察に出ることもある危険な仕事である。暖かな部屋でぬくぬくと過ごしている現実の彼とは際立った対照をなしている。しかし、第6行目以降になると彼の想像は様相を変えてくる。ベニシューによれば、*tourlourou* は徴用兵のことであり、志願兵ではない。しかも、白い手袋は日曜の外出の際につけるもので、詩人はこの日、任務から解かれ、宿営地にはいない。戦争のことも考えなくてよい⁽³⁰⁾。外出の目的地は分からないが、彼は道すがら棒切れを拾い、手に握ったまま歩いている。デイヴィスが言うように、この棒切れは現実の詩人が暖炉の近くに積んでおいた燃料用の薪から連想したものだろう⁽³¹⁾。国境警備の緊張感から解放されているにもか

かわらず、彼の心は憤怒にみなぎっている。このカトランで最も重要なのは *vierge courroux tout juste* である。これは何に対する憤怒なのか。注目すべきなのは憤怒を形容する *vierge* である。マラルメの他の韻文詩にもしばしば現れるこの形容詞は、ほとんどの場合、詩句それ自体を指したり、詩固有の美を指すのに用いられている。彼の詩のキーワードの一つと言ってもよい⁽³²⁾。普仏戦争の敗北によってもたらされた痛手がどれほど大きかったとしても、ドイツへの憤怒を形容するのにあえてこの語が選択されるとは考えにくい。また、憤怒には *tout juste* が続いており、この憤怒は正義に基づいている。憤怒には *vierge* が先行しているのだから、*tout juste* は政治や国民感情ではなく詩の立場から見た正義を含意していると推測される。これはつまり、戦争や紛争は一般に全ての当事者が正義を主張するが、そうした主張を含めて詩の外部にある基準の一切を拒絶する正義という意味であろう。マラルメにおいて詩は絶対的なものであり、いささかの相対化も許されない。正義の判断を詩の外部に託した時点で、その判断がいかなるものであれ、詩とは無縁である。では、詩と一体とも言うべき憤怒、しかも詩を基準にした正義に基づく憤怒とは、一体何に向けられたものなのか。それは次のカトランとそれに続くディスティックで明らかにされる。

第9行目は棒切れの形状を説明している。デイヴィスは、拾った棒切れは、戦闘用ではないから樹皮を剥して滑らかにする必要はないし、薪として使うわけでもないから付いたままにしておいてもよい、ということだと解釈している⁽³³⁾。確かにその通りだと思うが、問題は *nue* である。この形容詞も *vierge* と並んでマラルメの詩において重要な役割を担っている⁽³⁴⁾。樹皮を剥すと戦闘用になるが、その場合、詩固有の美がむき出しになった様子を指すべき *nue* が野蛮な暴力の準備を示唆してしまう。やや強引だが、棒切れの樹皮を剥しても美にならないから付いたままでも問題ないということだと考えることにしよう。

第10行目からは詩人が棒切れを持った理由が示される。チュートン人とはドイツ人を指す語である。これは単に民族的背景からドイツ人を指す語なのだが、19世紀には文脈に応じて蔑称として使われることもあった。詩人は国境警備の兵士になっているので、ここでこの語が蔑称の意味合いを帯びているのは明らかである。ところで、マラルメの詩篇を読み進めていた当時の読者たちは、こ

の語を目にするやいなや、かつて隣国から受けた恥辱を思い起こした可能性がある。というのも、普仏戦争の敗北の記憶と結びついたこの詩篇を読めば、戦争中にマスメディアを賑わせていたドイツ人の暴力性が喚起されるからである。例えば、開戦から間もない1870年8月上旬、フランス軍は手痛い打撃を蒙ったのだが、それに関して、ドゥピュイは同月21日の「リベルテ」紙に掲載された、戦意を高揚させるエミール・ド・ジラルダンの記事を紹介している。

もし奴らが、つまりフランス人の遺体から武器を取り上げるほど冷酷だったあれらプロシア人の強盗、人殺しどもが、我が国を侵略するなら、ああ、我々は〔プロシア兵のような〕破壊の天才が死を讃えて生み出したもの全てを奪い取ろう。我々の庁舎、我々の家々で、奴らの遺体をその残骸のもとに収容したいものだ。我々の地下納骨所が、奴らの呪われた遺体のもとで口を開けて、奴らを呑み込んでしまえばよい。〔…〕重要なのは、卑劣な烏どもを殺すことだけである。そして、銃声が止んだなら、奴らの宿营地で、夜の神秘的な静けさの中、ナイフを使ってあれら犬どもを殺してしまおう⁽³⁵⁾。

国のために勇敢に戦って命を落としたフランス兵から銃器その他の備品を奪うという、敵軍の許しがたい非道が、人間というよりもむしろ烏や犬の類の所業に近いものとして、このようにマスメディアを通して伝えられていた。この記事を読んだ戦時下の人々のプロシアへの怒りはどれほど高まったことだろう。詩篇の中のチュートン人はこのようなかつてのドイツ人の残虐さを読者に喚起する効果を持っている。また、これに付け加えて言うと、シヴェルブシュによれば、戦争に勝利したドイツはフランスを追い抜いてヨーロッパの強国の一員としての地位を確実に固めていっており、フランスでは1880年代後半以降、隣国に対する脅威の意識が高まっていた⁽³⁶⁾。そのような文脈に詩篇を置き直してみると、第10行目のチュートン人には、フランスにとどめを刺す機会を国境のすぐ向こう側で虎視眈々と狙っているドイツ兵の姿が重ねられていると解釈することができるだろう。

しかしながら、第10行目で示されているのは、詩人には棒切れでチュートン人と戦う意思がない、ということである。この詩篇においてチュートン人という語は戦時中の恐るべき敵を踏まえているので、それ自体で不可避的に対独報復感情を刺激する働きを持っている。この詩篇は冒頭の詩句から報復感情を喚

起していたが、その報復感情は第6行目から徐々に変質し、ついにこの第10行目で唐突に報復が問題になっていなかったことが明かされる。詩人の報復感情を追体験しながら詩篇を読み進めていった読者は、ここで唐突に放り出されることになる。

隣国と交戦する意思がないなら、詩人が憤怒に燃えて棒切れを手に行っている目的は何か。第11行目でその目的の一端が示唆される。彼は棒切れで何かを脅そうとしているのだ。何をか。その答えが出る前に、第12行目が挿入される。第1行目からここまで、彼は想像上の兵士であり続けてきた。兵士である以上、祖国を蝕もうとする外国勢力と命がけで戦うことを要求される。兵士となった彼も当然ながらこの要求を受ける。しかし、彼はそれには関心がない。彼にそうした要求を突きつけてくる人々は、この兵士の本当の狙いが分かっていない。想像の中で詩人は兵士である。ただし、戦う相手が現実の兵士の場合とは異なる。戦うべき相手は最後のディスティックで明かされる。

第13行目で詩人の本当の敵がイラクサであったことが判明する。彼は休日に出外している兵士であり、宿営地の門を出て山道を歩いている。その道には大きく育ったイラクサが繁茂し、彼の歩みを邪魔している。彼が棒切れを持っていたのはこのイラクサに向けて振り下ろすためだった。イラクサとは何のことか。最終行に示されているように、それは何かに強い賛意を表明している。そればかりでなく、彼にも賛意を表明するようにしつこく強要しているのだ。彼はそれを煩わしく思い、棒切れをちらつかせてイラクサを威嚇しているのである。このイラクサとは、対独報復論に全面的に賛成し、しかも反対したり、態度を決めかねている人々へも賛成するように強烈な同調圧力をかけてくる狂信的な報復論者たちのことである。デイヴィスはマラルメが夏のヴァカンスを過ごしていたヴァルヴァンの別荘に繁茂するイラクサからこの着想が生まれたと考えている⁽³⁷⁾。詩篇の舞台は冬の室内だが、この説は有力である。夏の雑草は生長が早い。何もしなければ際限なく繁茂し、短期間のうちに大地を覆い隠してしまう。詩篇の中のイラクサが示しているのは、対独報復論の支持者たちも、雑草のように増殖し、フランス社会を埋め尽くしてしまいそうな勢いを持っている、ということだろう。

また、ここではイラクサはもう一つの意味合いを帯びているように見える。

それは無個性という意味合いである。道端に生えているイラクサのそれぞれの葉叢に、はっきりとした違いを見出すのは難しい。本来、人間は一人ひとり考え方も価値観も大なり小なり異なっていて当然のはずだが、対独報復論者たちは、少なくともここまでの私たちの読解の範囲では、繁茂するイラクサのように、ほぼ規格化された同じ考えしか持っていない。彼らの主張にその人なりの個性はない。というのも、ここまで見てきたように、彼らは他者のことばを繰り返し見たり聞いたりしたことで、やがてそれらを自分自身のことばだと思い込んでしまうことで、報復感情に染まっていったからである。詩人が棒切れを手懸命に脅しているのは、そのように他者のことばを内面化し、自分自身で考えることができなくなってしまった均質的な人間集団、しかもその自覚のない人間集団だったと言えるだろう。

おわりに

注釈をひとまずここで終えよう。ここまで私たちは、この詩篇の読解を通して、なぜ無数の人々が対独報復論というたった一つの考えに染まっていくのか考えてきた。詩篇の読解から浮かび上がってきたのは、隣国との間に結ぶべき関係について自分自身でじっくりと考えたこともないのに、他者のことばを自分のことばと混同し、まるで自分自身の力で考えをまとめたと錯覚している対独報復論者たちの姿だった。注釈を終えた今、今度はこの詩篇が私たちに問いかけてくる、読者よ、あなたは何者なのか、あなたの考え、あなたの判断、そしてそれらの背後にあるあなたの価値観は、本当にあなたのものなのか、実際は借り物の寄せ集めにすぎないのではないか、気づいていないだけで対独報復論者たちと同じ轍を踏んでいるのではないか、そう問いかけてくる。私たちはその問いに答えなければならない。この作品は、私たちに対して、私たち自身を改めて見つめ直すように誘ってくる詩篇なのである。

註

- (1) «Petit air (guerrier)», *Œuvres Complètes I-II*, édition présentée, établie et

annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1998-2003 (abréviation: *OCI* et *OCII*), *OCI*, p.59. 本稿ではマラルメからの引用は全て拙訳を用いる。訳文の作成にあたっては、筑摩書房版『マラルメ全集』など多くの訳業を参照させていただいた。

- (2) «L'Action restreinte», *OCII*, p.214.
- (3) *Ibid.*, p.217.
- (4) Kevin O'Neill, «Mallarmé's "Petit air (guerrier)"», *Studi francesi*, 47-48, maggio-dicembre, 1972, p.378.
- (5) Gardner Davies, *Mallarmé et la «couche suffisante d'intelligibilité»*, José Corti, 1988, p.333.
- (6) *Ibid.*, p.340.
- (7) 川瀬武夫「マラルメとアナーキズム」、『ユリイカ 9月臨時増刊：総特集ステファヌ・マラルメ』、1986、p.148.
- (8) Paul Bénichou, *Selon Mallarmé*, Gallimard, «Bibliothèque des idées», 1995, p. 355.
- (9) Lettre du 3 mars 1871 adressée à Henri Cazalis, *OCI*, p.758.
- (10) *Ibid.*, p.759.
- (11) «La Dernière Mode. Septième livraison», *OCII*, p.623.
- (12) «Parenthèse», *OCII*, p.190.
- (13) «Sur l'Alsace-Lorraine», *OCII*, p.668.
- (14) *Ibid.*
- (15) ヴォルフガング・シヴェルプシュ『敗北の文化——敗戦トラウマ・回復・再生』、福本義憲、高本教之、白木和美訳、法政大学出版局、2007、p.146.
- (16) «Sur l'Alsace-Lorraine», *op. cit.*
- (17) Paul Bénichou, *op. cit.*, note2, p.353.
- (18) Kevin O'Neill, *op. cit.*, p.378.
- (19) Gardner Davies, *op. cit.*, p.340.
- (20) Paul Bénichou, *op. cit.*, note1, p.353.
- (21) *Ibid.*, p.353.
- (22) *Ibid.*, note4.
- (23) Kevin O'Neill, *op. cit.*
- (24) Gardner Davies, *op. cit.*, p.334.
- (25) Paul Bénichou, *op. cit.*, note3.
- (26) Pierre Albert, *Histoire de la presse*, huitième édition corrigée, Presses universitaires de France, «Que sais-je?», 1996, p.65.
- (27) Aimé Dupuy, *1870-1871: La guerre, la commune et la presse*, Armand Colin,

- «Kiosque», 1959, pp.45-46.
- (28) *Ibid.*, pp.59-60.
- (29) *Ibid.*, p.75.
- (30) Paul Bénichou, *op. cit.*, p.354.
- (31) Gardner Davies, *op. cit.*, p.341.
- (32) ドゥマン版『詩集』の巻頭を飾る「挨拶」の冒頭の詩句、Rien, cette écume, vierge vers をその代表例として挙げることもできるだろう。「Salut», *OCI*, p.4.
- (33) Gardner Davies, *op. cit.*, p.337.
- (34) 「エドガー・ポーの墓」の第2行目、Le Poète suscite avec un glaive nu に見られるように、マラルメの詩において nu は重要な意味合いを帯びている。「Le Tombeau d'Edgar Poe», *OCI*, p.38.
- (35) Aimé Dupuy, *op. cit.*, p.64.
- (36) ヴォルフガング・シヴェルプシュ、前掲書、p.177.
- (37) Gardner Davies, *op. cit.*, p.341.